

学生への指導を踏まえ、幼小接続を見据えた  
小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言  
—環境を通して、子どもの表現を多様な表現へと育て、小学校各教科  
等の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることの解明と方策—

清水 邦彦\* 小幡 肇\*\*

Proposal on Teaching Methods towards Representation Skills in Life Science and  
Arithmetic for Preservice Teachers:

Elucidating and Promoting a Smoother Transition from Early Childhood to  
Elementary School Education Based on the Characteristics of Elementary School  
Subject and by Cultivating Various Representation through the Environment

Kunihiko SHIMIZU, Hajime OBATA

**要旨** 本研究の目的は、保育士・幼稚園教諭養成機関において、保育士・幼稚園教諭を目指す学生の、環境を通して、子どもの表現を多様な表現へと育てる指導の意識を明らかにするとともに、小学校「生活」「算数」の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることができることを目的とした指導法及び表現の指導についての提言をすることである。

保育士・幼稚園教諭を目指す学生に対して、アンケート調査を実施し、その分析の結果、提言は次の3つの視点からなされた；①幼小接続期カリキュラム作成について学ぶこと、②子どもの表現を多様な表現へと育て、小学校「生活」における表現へと接続を図ることを目指した表現の指導について学ぶこと、③算数科の特質に応じた数学的な表現の指導について学ぶこと。

**キーワード**：幼小接続 生活 算数 教員養成 表現

## 1. はじめに

筆者（清水）\* は、約1ヵ月前に子どもが誕生し、子どもは、「あ、あ、あ」と、現在、言葉ではなく、音を発している。一方、筆者（小幡）\*\* の孫（現在2歳9か月）は、昨年、言葉を使い始めた。お気に入りの新幹線のDVDを見ると、流れるテーマソ

ングを一緒に口ずさむ。しかし、よく聞いていると、「さあ、いこう」と流れると、「さあ」の「あ」だけ、「いこう」の「う」様であり、どうやら長く伸ばす語の音にだけ反応できるようであった。

それに対して、電車に乗りたいという意志を表す際には、「のる」「のりたい」の「の、の、の」と連呼するのである。筆者は、そこには、DVD映像を視聴するという感覚的なかわりに対し、実際に大好きな電車に乗るといった体験的なかわりへの思い

\* しみず くにはこ 文教大学教育学部心理教育課程

\*\* おばた はじめ 文教大学教育学部心理教育課程

入れの強さの違いがあるのではないかと考えた。

そして、3歳、4歳、5歳と育つ中で、身の回りの物的・人的・社会的な環境にかかわることが増えることによって、1音（1文字）からの表現が多様な表現へと育って行くのだろうと考えた。

文部科学省は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿を示し、改訂幼稚園教育要領及び改訂小学校学習指導要領における目標を、育みたい資質・能力「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」という3つの柱を共通のものにして示した。特に、幼稚園教育においては、5領域の枠組みで、遊びを通して総合的な指導を行う中で一体的に育むことが重要であるとした。さらに、幼児期に総合的に育まれた資質・能力や子どもの成長を、小学校各教科等の特質に応じた学びにつなげることを求めた<sup>1)</sup>。

それでは、環境を通して、子どもの表現を多様な表現へと育て、小学校各教科等の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図るには、保育士・幼稚園教諭養成機関において、どのようなことを解明し、どのような方策を講じていくとよいのだろうか。例えば、保育士・幼稚園教諭を目指す学生は、環境を通して、子どもの表現を育てる指導について、どのような意識や知識をもっているのだろうか。また、学生は、幼稚園教育で環境を通して子どもの表現を多様な表現へと育てることから、小学校各教科等、特に「生活」「算数」に焦点をあてた特質に応じた表現へとスムーズな接続を図る上において、どのような指導法及び表現の指導を意識しているのだろうか。

そこで、本研究では、保育士・幼稚園教諭養成機関において、保育士・幼稚園教諭を目指す学生の、環境を通して、子どもの表現を多様な表現へと育てる指導の意識を明らかにする。そして、小学校「生活」「算数」の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることができることを目的とした指導法及び表現の指導についての提言をする。

## 2. 研究の方法

研究の方法は、まず、文献を中心とした先行研究

により、幼小接続にかかわって、環境を通して、子どもの遊びや表現を育てる保育について、概観する(3章)。

次に、保育士・幼稚園を目指す教員養成系大学に通う学生に対して、領域「環境」及び「生活」「算数」の立場から、表現にかかわるアンケートを実施し、表現にかかわる教員養成系大学に通う学生の意識を浮き彫りにする(4章)。

最後に、環境を通して、子どもの表現を多様な表現へと育て、特に、「生活」「算数」の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることができることを目的とした指導法及び表現の指導を提言する(5章)。

なお、本研究において、表現は、内面的・精神的・主体的な思考や感情などを、外面的・客観的な形あるものとして外へ表すことであると規定する。例えば、話しことばや書きことば、表情・身振りなど、表出しているものである。また、自己や自己内への表現も含む。

また、アンケート作成に関しては、清水が作成し、小幡と共同で検討・修正する。アンケートの結果・処理については、清水が担当し、分析は小幡と共同で行う。

## 3. 環境を通して子どもの遊びや表現を育てる保育

第一に、椛島、尾田、安達<sup>2)</sup>は、「遊びの充実を図る保育環境構成」について、「幼児が幼稚園の環境に主体的にかかわっていく過程がよみとれる事例」や「遊びの中でねらいを達成していく姿、(略)望ましい経験を得ていることがよみとれる事例」の分析を通して、保育者が環境構成をする際の配慮や具体的な環境構成を明らかにした。

まず、3歳児(12月生まれ)女兒の入園当初から1学期末までの事例を分析し、保育者が環境構成する際の配慮として、次の6点を明らかにした。

- ・遊びが見つかりやすいよう、目につく場所にもものを設定する
- ・一人でも参加できる遊びの種類を多く設定する
- ・道具や材料の量を多くする、人数によってスペースを変えるなど、やりたいことをやりたいときに

学生への指導を踏まえ、幼小接続を見据えた小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言

できるようにする

- ・不安定な幼児、遊びを始めることができない幼児に対しては、保育者が一対一でかかわり、保育者を拠り所として遊びに参加できるようにする
- ・十分に楽しめるよう、保育者も一緒に遊んだり、遊びをリードしたりする
- ・保育者は遊びの様子を見守り、不安定になった時、できないことがあった時などにかかわるようにする

次に、4歳児グループの「海賊船ごっこ」(11月)の事例を分析し、「子ども同士のかかわりを生み出す環境構成」として、次の2点を明らかにした。

- ・小人数で遊びを展開できるような場所(拠点)を、幼児が場に対する愛着が持てる形で設定する
- ・遊びの拠点には、遊びのイメージに合わせて使いやすい教材を置く

また、5歳児グループ(7月)のままごと遊びからレストラン遊びへ発展した事例を分析し、「子どもの協同を生み出す環境」として、次の3点を明らかにした。

- ・遊びのイメージを言語化する機会をもち、イメージの共有を図る
- ・保育者が遊びに参加することで、幼児に様々な役割があることをモデルとして示す
- ・遊びに必要なものを紹介したり、提供したりする

第二に、増田<sup>3)</sup>は、『自己肯定感』を育てる保育のあり方』に着目し、「子どもの言葉を聴き取る保育実践のあり方」と「子どもの言葉を育てるための方策」を探った。そのために、増田は、口頭詩を手がかりにして、子どもの言葉を発達させる言葉がけ、例えば、キョウリュウについて話している子どもに、保育士が「キョウリュウは、なんて言った」と働きかけることによって、会話がつながっていくことを取り上げた。そして、「子どもの言葉を聴き取ると同時に(略)子どもの話を広げていき、他の子どもに問いかけていく」ことによって、「子

ども同士がつながり、豊かな会話がかわされる」ことを明らかにした。

また、「小学校へとつながる学力の基礎としての保育実践について意識していく」ことや「人と人がつながる言葉を教えていく」ことが大切であり、「幼・保・小の連携とは、幼少期に豊かな人間性を育てていく」ことであると提起した。

さらに、『小集団』→『中集団』→『大集団』という形で、集団の段階をあげていくことが、幼・保・小の連携の一形式である」と提起した。

#### 4. 保育士・幼稚園教諭を目指す学生の意識調査と分析

##### (1) 保育士・幼稚園教諭を目指す学生の意識調査

保育士・幼稚園教諭を目指して、教員養成系大学に通う学生が抱く「子どもの表現」について、アンケートによる意識調査をした。それは、領域「環境」及び「生活」「算数」の立場から、子どもの表現を育てることにかかわる教員養成系大学に通う学生の意識を浮き彫りにするためである。アンケート用紙は、図4の通りである。

【目的】 保育士・幼稚園教諭を目指す学生が抱く「子どもの表現」についての調査

【対象】 保育士・幼稚園教諭を目指す教員養成系私立大学に通う学生

【形態】 無記名・選択式及び記述式

【データ数】 N = 45

##### (2) アンケート調査の分析

分析は、小学校生活科と小学校算数科の立場から行った。まず、本節の①ではQ1のアンケート結果をもとに、全体的な概観について述べる。次に、本節の②と③では、②小学校生活科と③小学校算数科に焦点をあてて分析を行い、課題を浮き彫りにする。

##### ①全体的な外観(質問項目Q1に関わって)

学生は、子どもが遊びや具体的な活動を通して学ぶことや子どもの表現を育てることは重要と考えており(Q1-1)、子どもの表現をどのように育てるかを具体的に学ぶことを望み(Q1-2)、大学の授業で、

「子どもの表現を広く捉え、子どもが経験や環境への関わりを通して、様々な遊びや表現活動を行う」とはどういうことであるかを学ぶことの大切さを感じている(Q1-3)。とりわけ、「子どもの内面は様々な形で表出しており、保育者はその様々な表出から子どもの内面を読み取り、共感することが大切である」(Q1-8)では、全員が肯定的な反応をし、「とてもそう思う」という学生が69%にも上る。

一方で、いくつかの質問項目では、「とてもそう思う」が大きな割合を占めているのに対し、「とてもそう思う」という反応を示した学生が少なく、「そう思う」という反応を示した学生が多くを占めるとともに、一部で否定的な反応を示した、他の質問項目とは若干傾向が異なる質問項目がある。それは、Q1-4, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 22, 23である。これらの質問項目をみると、「〇〇ができる」という資質・能力にかかわる質問項目(Q1-4, 13, 14, 15, 16)と、小学校生活科にかかわる質問項目(Q1-21, 22, 23)及び小学校算数科にかかわる質問項目(Q1-17, 18, 19, 20)である。

小学校生活科と小学校算数科に関わる詳細な分析は、本節の②と③で後述するが、この若干傾向が異なるのは「〇〇できる」という自身の資質・能力と幼稚園での実現性にかかわることに不安をもっていること、そして、幼小接続の立場で小学校へつなげることの重要性を感じていない傾向にあると分析する。

また、小学校算数科の方が強く、その重要性を感じていない学生が多いと考える。これは、小学校生活科が実生活に根差しながら、環境とかかわり合いをもつという意味合いで、幼稚園での学びとの親和性が高い。一方で、学生の中で、小学校算数科は「学び」として確立しつつ、幼稚園での学びとは算数・数学という意識での距離があるととらえられているためと考える。

以下では、②小学校生活科と③小学校算数科に焦点をあてて、質問項目全体に対して分析をしていく。

## ②小学校生活科に焦点をあてて

第一点、「表現活動に取り組む様子を具体的に考えることができる」(Q1-4)についてである。「と

てもそう思う」と回答した学生は7名、「そう思う」と回答した学生は28名である。アンケート調査時、学生は、すでに前期幼稚園実習(5月に2週間)を終えている。この差をどう考えるか。

幼稚園教育実習中、学生は、担当教師や子どもの様子の観察、学生自身がたてた計画の実施などで精一杯の状態であった。子どものつぶやきや教師への吐露及び友だちとの対談などに、心を傾け、聴きとめ、解釈し、そこから言葉かけを試みたという経験は少なかったと考える。そのような経験の少なさが、自身の資質・能力の不安につながり、「表現活動に取り組む様子を具体的に考えることができる」と判断することに、躊躇させたと分析する。

そのことは、Q1-13, 14, 15, 16の質問項目「～を具体的に思い浮かべることができる」について、「とてもそう思う」と回答した学生は7～12名、「そう思う」と回答した学生は23～26名であるということと相関していることからいえる。

第二点、Q1-21, 22, 23の質問項目「学生時代に身に付けたい力」についてである。「とてもそう思う」と回答した学生は19～26名、「そう思う」と回答した学生は16～22名で、肯定的に反応した人数が多い。これは、前述した、心を傾け、聴きとめ、解釈し、そこから言葉かけを試みたという経験は少なから生じる、自身の資質・能力の不安に対する裏返しであると判断できる。そして、活動が生まれるしかけをつくる力やかかわりをとらえる見方・考え方を身に付けることへの切実感へとつながり、学びや表現を理解することを通して具体的な指導法を求めることへの高まりにつながっていると分析する。

そのことは、Q2の質問項目における「子どもが主体的に試したり考えたりすることができる支援、言葉かけができる力」「遊びの中での、子どもの工夫、発見、思考を拾い上げる力」「子どもが主体的に試したり考えたりすることができる環境作りができる力」を身に付けることへの優先順位の高さに相関していることからいえる。

第三点、Q4の質問項目「子どもの活動と子どもの表現との関連」についてである。学生が、子どもの表現を育てる上において有効だと思い、保育者として行いたい活動である。小学校生活科の特質に

じた表現へとスムーズな接続を図ることにつながる活動として、「友だちの考えを取り入れたり、友だちと協力したりして遊びをつくっていく活動（32人）」「絵本を読む活動（31人）」「身のまわりの人や友だちに伝え合う活動（24人）」などから、言語活動を取り入れることが有効であるととらえている学生が多いことが分かる。次いで、「生き物や植物などの世話を育てる活動（24人）」「身近なものを使っておもちゃを作って遊ぶ活動（22人）」「気付いたことを絵や身体表現や劇など、多様な方法により表現する活動（18人）」「葉っぱなどを集めて形の特徴に気付き、それを表現する活動（16人）」「地域の人や年長者と関わる活動（15人）」など、具体的な活動や多様な表現活動を通して育てることが大切であるととらえている学生が多いことが分かる。

しかし、「文字に親しむ活動（11人）」は国語科にかかわる活動、「コップに入っている水を様々な容器に入れる活動（10人）」は算数科にかかわる活動、「大きさを比べる活動（8人）」「ものの性質や仕組みに気付く活動（7人）」は理科にかかわる活動、「どんぐりを転がして、見つけた関係を整理する活動（2人）」は科学的な思考に関わる活動として、幼稚園教育に馴染まないにとらえていることがうかがえる。

これは、保育士・幼稚園教諭を目指す学生が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」及び改訂幼稚園教育要領・改訂小学校学習指導要領における「思考力・判断力・表現力等の基礎」に対する認識の低さに起因していると分析する。

また、「地域の公園や野原で遊ぶ活動（8人）」「公共施設に出かける活動（6人）」は保育園・幼稚園の子どもを容易に園外に連れて行きにくいというイメージから、「自分の成長を見つめ、振り返る活動（5人）」は時間認識にかかわる難しさから、敬遠しているとうかがえる。

### ③小学校算数科に焦点をあてて

本節ですでに述べたように、「〇〇ができる」という質問項目では、学生のもつ現時点での実現性について、何かしらの不安をもっていることがうかがえる。とりわけ、幼稚園や保育園にかかわる内容であるにもかかわらず、そのような反応を示している

ことは自然である。小学校算数科の立場から、このことを踏まえてみていく。

小学校算数科に直接かかわる質問項目は、Q1-17, 18, 19, 20, 及び、Q2-5, 6, Q4である。まず、Q1-17, 18, 19, 20の質問項目について、Q1-17, 18の質問項目は数量感覚を日常生活（活動）の中から触れ、かわり、培っていくという内容である。それらの質問項目では、「とてもそう思う」という反応を示した学生が減少し、「そう思う」「どちらにもあてはまらない」「そう思わない」という反応を示した学生が一定数いる。Q1-19, 20の質問項目は、Q1-17, 18の質問項目よりも、算数・数学への接続が意識され、それらの資質・能力に関わる内容が垣間みられる質問項目である。Q1-19, 20の質問項目の反応は、Q1-17, 18の質問項目の反応よりも一層否定的な結果となっている。これらのことは、幼稚園・保育園で数量感覚を培うことは、学生のもつ幼稚園・保育園への意識と差があることを示しており、否定的な意識をもっていることに他ならない。加えて、算数・数学の内容や資質・能力への接続にまで踏み込んだ内容になると、一層否定的になっている。

Q2の質問項目においては、保育者になるにあたり、学生時代に身に付けておくべき力について問われているが、算数・数学に直接かかわる質問項目「子どもの育ちの中で、数学的な考え方の基礎を見抜く力」（Q2-5）、「子どもの生活の中にある素材（教材）の提供と発展を見抜く力」（Q2-6）では、学生の価値観はとても低い。本稿で前述した、分析内容を支持するものである。

Q4の質問項目では、「子どもの活動と子どもの表現との関連」について、保育者としてどの活動を行いたいかを聞いたものである。一部の質問項目（Q4-2, 4, 5, 6, 7, 13, 14, 16, 18, 20）では、算数にかかわる内容があり、それらを選んだ学生は少ない。なお、Q4-17の質問項目は図形にかかわり、Q4-19は量にかかわるものであるが、現在、いくつかの幼稚園でも行われるものであり、多少なりとも選んだ学生がいたと考える。この結果も、本稿で前述した、内容分析を支持するものである。

Q5とQ6の質問項目の自由記述では、数量感覚や算数・数学の資質・能力への接続に関して記述した

学生は1名もいない。

このように、小学校算数科にかかわる質問項目では、反応がよくないととらえた。すなわち、教員養成系の大学に通う幼稚園・保育園を目指す学生には、幼稚園・保育園における固定化された信念があり、それは、歌を歌う、遊びや活動を通してかかわり、触れるといった事柄だけに留まっていると想定される。そして、数量感覚を活動の中で培うことにも否定的な反応を示し、さらに、算数・数学の資質・能力への接続については一層否定的な考えももっていた。

#### ④ ①～③を踏まえた総合的考察

本章では、子どもの表現を育てることにかかわる教員養成系大学に通う学生の意識を浮き彫りにするために、領域「環境」及び「生活」「算数」の立場から、アンケートによる調査を行い、その調査の結果を分析した。

分析の結果、以下の点が明らかになった。

第一点、学生は、大学の授業において、経験や環境へのかかわりを通して遊びや表現活動を行うこと、子どもの表現を広くとらえ、子どもの内面を読み取り、共感することが大切であるということを知っている。そして、それをどのように育てるかを、学ぶことを望んでいる。一方で、自身の資質・能力にかかわることや小学校「生活」「算数」にかかわる内容の指導について、不安もっている。そして、幼小接続への立場で、小学校へつなげることの重要性をあまり感じていない傾向にある。特に、学問としての算数・数学という意識で、それらは幼稚園での学びとは距離があるものととらえている。

第二点、小学校生活科の立場からである。学生は、子どもの内面を読み取り、共感するような経験が少なく、それが自身の資質・能力の不安につながり、子どもの表現活動、自発的な行動、環境構成と子どもにかかわり、エピソードや学びを述べるなどについて、自信をもてない。そのため、学生時代に身に付けたい力は、自身の資質・能力の不安に対する裏返しとして、子どもが主体的に試したり考えたりすることができる支援や言葉がけができる力、子どもの工夫や発見や思考を拾い上げる力、子どもが主体的に試したり考えたりすることができる環境作

りができる力などを考えている。また、子どもの表現を育てる上において有効であり、行いたい活動は、言語活動を取り入れることが有効であり、具体的な活動や多様な表現活動を通して育てることが大切であるととらえている。

一方で、小学校の各教科的な活動は幼稚園教育に馴染まないのとらえており、「見つけた関係を整理する」「比べる」「ものの性質や仕組みに気付く」「自分の成長を見つめ、振り返る」などに対する意識は低い。これは、保育士・幼稚園教諭を目指す学生が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」及び改訂幼稚園教育要領・改訂小学校学習指導要領における「思考力・判断力・表現力等の基礎」に対する認識の低さに起因していると考えられる。また、保育園・幼稚園の子どもを園外に連れて行くことや時間認識にかかわる活動は、敬遠していることがうかがえる。

第三点、小学校算数科の立場からである。まず、数量感覚を日常生活（活動）の中から触れ、かかわり、培っていくことに関してである。算数・数学への接続が意識され、それらの資質・能力に関わる内容が垣間みられる。しかし、幼稚園・保育園で数量感覚を培うことは、学生のもつ幼稚園・保育園への意識と差があることを示しており、否定的な意識ももっている。加えて、算数・数学の内容や資質・能力への接続にまで踏み込んだ内容になると、一層否定的になっている。

次に、学生時代に身に付けておくべき力についてである。算数・数学に直接関わる質問項目の「子どもの育ちの中で、数学的な考え方の基礎を見抜く力」(Q2-5)、「子どもの生活の中にある素材（教材）の提供と発展を見抜く力」(Q2-6)では、学生の価値観はととても低い。

さらに、子どもの活動と子どもの表現との関連についてである。Q4の質問項目で算数にかかわる内容を選んだ学生は少ない。なお、Q4-17の質問項目は図形にかかわり、Q4-19の質問項目は量にかかわるものであるが、現在、いくつかの幼稚園でも行われるものであり、多少なりとも選んだ学生がいたと考える。そして、数量感覚や算数・数学の資質・能力への接続に関しては1名もいない。

学生への指導を踏まえ、幼小接続を見据えた小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言

このように、小学校算数科にかかわる質問項目では、反応がよくないととらえた。すなわち、保育士・幼稚園教諭養成機関において、幼稚園・保育園を目指す学生には、幼稚園・保育園における固定化された信念があり、遊びや活動を通してかかわり、触れるといった事柄だけに留まっていると想定される。そして、数量感覚を活動の中で培うことにも否定的な反応を示し、算数・数学の資質・能力への接続については一層否定的な考えをもっていた。

## 5. 環境を通して、子どもの表現を多様な表現へと育て、小学校「生活」や「算数」における表現へと接続を図る指導法および表現の指導への提言

### (1) 生活科を核とした接続を図る指導法（幼小接続期カリキュラム）からの提言

文部科学省は「平成26年度幼児教育実態査」(2015年)を実施し、市町村ごとの幼小接続の状況を報告した<sup>4)</sup>。

平成24年度は、幼稚園・子ども園ともに未設置が1.5%、「ステップ0」が10.7%、「ステップ1」が8.7%、「ステップ2」が62.1%、「ステップ3」が13.8%、「ステップ4」が3.2%だった。また、その結果は、2年後の平成26年度は、幼稚園・子ども園ともに未設置が1.4%、「ステップ0」が9.6%、「ステップ1」が7.8%、「ステップ2」が59.6%、「ステップ3」が17.0%、「ステップ4」が4.5%となった。

表1 連携から接続へと発展する過程  
おおまかな目安「平成26年度幼児教育実態査」(2015年)

「ステップ0」: 連携の予定・計画がまだない
「ステップ1」: 連携・接続に着手したいが、まだ検討中である
「ステップ2」: 年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない
「ステップ3」: 授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている
「ステップ4」: 接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている

そして、次のように考察した。

目指す子供の姿や育てたい力が明確である。柱立てやより詳細な視点がアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの両方に位置づいており、つながり（接続）が明示されている。カリキュラムに、援助・支援や指導の工夫・配慮、家庭との連携、特別支援が位置づいている。実践事例・実践例など具体例が提示され、柱立てやより詳細な視点に沿って考察されている。事例の中で幼保小のつながりを示す工夫がされており、子供の学びや育ちのつながり（協同性、学びの芽生え等）が見えやすい。

これを受け、文部科学省は、現在、幼小接続は「ステップ3」であるとし、幼小接続期カリキュラムとして、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを打ち出している。

そこで、第一点、教員養成系の大学での領域「環境」の授業において、「生活」の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることができることを学ぶことができるようにするための提言として、幼小接続期カリキュラム（5歳児の保育に関するアプローチカリキュラムと小学校入学後の教育に関するスタートカリキュラム）作成について学ぶということを提言する。

提言1は、5歳児の保育に関するアプローチカリキュラム作成について学ぶことである。学生が、領域「環境」の授業において、表現活動に取り組む様子、自発的な行動、環境構成と子どものかかわり、エピソードを収集する、学びを述べるなどを、具体的にすることができるようにすることが大切である。そして、「生活」を核とした幼小接続期カリキュラムの作成に必要な、目指す子どもの姿や育てたい力を明確にすることを学ぶことができるようにする必要がある。しかし、学生の実態は、子どもの内面を読み取り、共感するような経験が少なく、子どもの表現活動、自発的な行動、環境構成と子どものかかわり、エピソードや学びを述べるなどについて、自信がない状態である。

そこで、領域「環境」の授業において、実際の子

どもの様子に基づくロールプレイング形式の活動とその様子の解釈を発言し聞き合う活動を実施する。そして、その観察結果と考察を学生自らが気づき発言する活動が生まれる授業を重視する。つまり、学生が、保育士・幼稚園教諭のように、実践現場の様子に即して実践現場の様子を解明する作業に近づくことによって、アプローチカリキュラム作成における目指す子どもの姿や育てたい力を明確にすることができるようになる。そして、そこから、柱立てやより詳細な視点を設定することが可能となり、子どもの学びや育ちのつながり（協同性、学びの芽生えなど）が見えやすいものにすることができるようになる。と考える。

提言2は、小学校入学後の教育に関するスタートカリキュラム作成について学ぶことである。「生活」を核とした幼小接続期カリキュラムの作成は、「比べる」「見つけた関係を整理する」「ものの性質や仕組みに気付く」「自分の成長を見つめ、振り返る」という視点を、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭が共有して、保育所・幼稚園及び小学校での計画を構想することが重要である。

そこで、領域「環境」の授業において、実際の子どもの様子と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」及び「思考力・判断力・表現力等の基礎」との関連に気付くことができる授業を実施し、「比べる」「見つけた関係を整理する」「ものの性質や仕組みに気付く」「自分の成長を見つめ、振り返る」という視点を大切にしたい保育を行うことができるようにする。そこから、スタートカリキュラム作成に必要な、援助・支援や指導の工夫・配慮を構想することができるようになる。と考える。

また、領域「環境」の授業において、「生活」の学びとの関連を学ぶことができるようにする。その際、特に、地域の公園や野原で遊ぶ活動・公共施設に出かける活動に対する、保育所・幼稚園の固有の課題を克服する手だてを学生が考え合うことにより、今後の幼小接続期カリキュラム作成にかかわる課題にも向き合うことができると考える。

第二点、「生活」の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることができることを学ぶことができるようにするための提言として、環境を通して、子

どもの表現を多様な表現へと育て、小学校「生活」における表現へと接続を図ることを目指した表現の指導について提言する。

提言1は、領域「環境」の授業において、子どもの協同を生み出す環境を通して、子どもの言葉を育てることについて学ぶことである。学生は、環境構成の工夫として、遊びを展開できるような場所（拠点）を、子どもが場に対する愛着が持てる形で設定し、遊びのイメージに合わせて使いやすい教材を置くことなどを学ぶ。そこから、その環境を通して、遊びのイメージを言語化する機会をもち、イメージの共有を図る場面や、保育者が遊びに参加することで様々な役割があることをモデルとして示す場面などの模擬保育を行う。そのような、模擬保育に取り組む中で、子どもの言葉を発達させる言葉がけとして、「子どもの言葉を聴き取ると同時に（略）子どもの話を広げていき、他の子どもに問いかけていく」ことを通して、「子ども同士がつながり、豊かな会話がかわされる」様子を取り入れることができるようにする授業が必要である。と考える。

提言2は、「小学校へとつながる学力の基礎としての保育実践について意識していく」ことについて学ぶことである。そのために、環境を通して遊んだり活動したりしている子どもの表現の中から、「比べる」「見つけた関係を整理する」「ものの性質や仕組みに気付く」「自分の成長を見つめ、振り返る」という視点につながる子どもの具体的な言葉に気付く、広げることが学ぶ授業を行うことが必要である。と考える。また、「人と人がつながる言葉を教えていく」という視点につながる子どもの具体的な言葉に気付く、広げることができるようにすることを学ぶ授業を行うことが必要である。と考える。

## （2）算数科の特質に応じた数学的な表現の指導からの提言

4章において、学生は、幼稚園・保育園に対する固定化された信念があることが分かった。とりわけ、経験や環境へのかかわりを通して遊びや表現活動を行うこと、子どもの表現を広くとらえ、子どもの内面を読み取り、共感することである。このことと同時に、幼稚園・保育園で、数量感覚を活動の中



で培うことに否定的な反応を示し、さらに、算数・数学の資質・能力への接続については一層否定的な考えをもっていた。

現在、小学校1年生の算数では、日常生活と算数を結びつけるような内容で構成されている。そのことは、教科書においても顕れており、日常や遊びの中から算数として関連付けながら、みいだしていくこととしている。改訂小学校学習指導要領解説 算数編<sup>5)</sup>の小学校1年生において、「幼児期の教育において、遊びや生活の中で、一人一人の幼児がその幼児なりに必要感をもって、数量などへの関心をもち感覚が磨かれるような体験をしていることなどを踏まえ、指導の工夫を行うことが大切である。」と書かれている。このことは、小学校2年生になっても幼稚園との接続の意識は重要であるが、まずは、小学校1年生との接続に目を向けて、小学校との接続をより意識していかなければいけない。

一方、算数・数学における表現について、中原<sup>6)</sup>は、以下のような数学教育における表現体系(図1)を示し、授業との関連を表現様式と授業過程モデルの関係(図2)で示した。

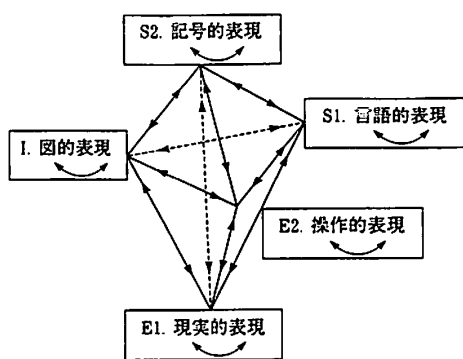


図1 数学教育における表現体系<sup>6)</sup>

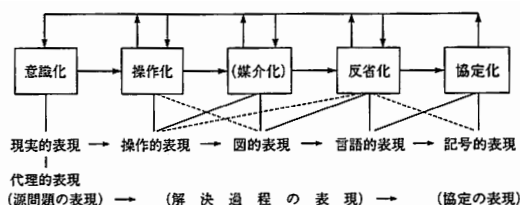


図2 表現様式と授業過程モデルの関係<sup>6)</sup>

小学校1年生では、すでにみたように日常や遊びから、算数を抽出し、みいだしていく。教科書<sup>7)</sup>(図3)においても、小学校1年生では、日常や遊びの中にある事柄をもとに、E1. 現実的表現やE2. 操作的表現、I. 図的表現で表現されており、算数をみだし、日常や遊びと算数を関係づけていく流れになっている。



図3 ある算数の教科書の1年生<sup>7)</sup>

もちろん、小学校1年生の授業過程では、S1. 言語的表現やS2. 記号的表現も扱われるが、図2における意識化・操作化・媒介化に多くの時間が費やされ、その際にはE1. 現実的表現、E2. 操作的表現、I. 図的表現が多く使われる。これら表現は、幼稚園においてもなされている表現であろう。

では、幼小接続を意識した時に、どのような指導が学生に必要であるか。それは、アンケートの結果から明らかになった、学生の数量感覚を培うことに否定的な信念、そして、算数・数学への資質・能力への接続はさらに否定的な信念をもっていたので、この点の改善が必要である。そのためには、幼稚園・保育園を目指す学生に対して、小学校1年生での算数の学びについて知ることが重要である。よって、幼小接続の立場と小学校算数科の立場からの提言は、幼稚園・保育園教員養成機関におけるカリキュラムで、小学校1年生の算数の学びまでを含めた、教員養成に関わる授業を実施することである。

この提言は、例えば、幼小接続の立場から「環境」の学びだけでなく、その延長にある小学校1年

生の「算数」も行うことが望まれている。ゆえに、大学における授業の展開としては、小学校1年生の算数の授業を知る、その教科書に触れる、どのような学習活動が行われており、どのような数学的な表現が扱われているか等を知ることである。

本節でみてきたように、E1. 現実的表現、E2. 操作的表現、I. 図的表現は小学校1年生で中心的に扱われており、それらの表現を活用した活動は幼稚園・保育園でもなされてきている。ゆえに、少なくとも小学校1年生での学びを学生が知ることは、幼稚園・保育園教員養成課程に在籍する学生の不安や否定的な信念を少しでも改善することになる。

本提言について、具体的な幼稚園の活動の一例は、以下のとおりである。

- ・椅子取りゲームの際に、残りの数を数え上げる活動。幼児が先生とともに「1個、2個、3個、…」と一緒に数える活動。その方法は、例えば、途中まで先生が数え上げて、最後の一脚を子どもに発言させる活動が考えられる。
- ・階段を上る活動で、「1段、2段、3段、4段、…」と数え上げながら上るとともに、改めて「1、2、3、4、…」と単位を意図的に外して数え上げる活動。
- ・積み木で遊ぶ活動で、どれとどれをくっつけば隙間なく敷き詰められるかという、図形の性質について触れる活動。また、積み木の片付けの際にも、どうやったら積み木がはじめ入っていた箱にぴったり入るか、形について教師が幼児に問いかけながら、幼児が感じ、触れ、言葉で答える活動。

このように、本提案は、現在、なされている幼稚園・保育園の教員養成機関におけるカリキュラムの延長上にあるものであり、現在の学生の意識に対して抵抗の少ない改善の提案である。

## 6. まとめと今後の課題

本研究の目的は、環境を通して、子どもの表現を多様な表現へと育て、小学校「生活」「算数」の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることがで

きることを目的とした指導法及び表現の指導についての提言であった。研究の成果は次のとおりである。

第一点、幼小接続期カリキュラム作成について学ぶことである。提言1は、5歳児の保育に関するアプローチカリキュラム作成について学ぶことである。そのために、領域「環境」の授業において、学生が実践現場の様子に即して実践現場の様子を解明する作業に近づく授業を行うことが必要であると考ええる。そして、アプローチカリキュラム作成において必要なこと（目指す子どもの姿、育てたい力、柱立て、より詳細な視点、子どもの学びや育ちのつながり）を構想することができるようになると思える。

提言2は、小学校入学後の教育に関するスタートカリキュラム作成について学ぶことである。そのために、領域「環境」の授業において、実際の子どもの様子と「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」及び「思考力・判断力・表現力等の基礎」との関連に気付くことができる授業を行うことが必要であると思える。そして、「比べる」「見つけた関係を整理する」「ものの性質や仕組みに気付く」「自分の成長を見つめ、振り返る」という視点を大切にしたい保育を行うことが、スタートカリキュラム作成に必要なこととなる。援助・支援や指導の工夫・配慮を構想することができるようになると思える。

第二点、子どもの表現を多様な表現へと育て、小学校「生活」における表現へと接続を図ることを目指した表現の指導について学ぶことである。提言1は、模擬保育の中で、「子どもの言葉を聴き取ると同時に（略）子どもの話を広げていき、他の子どもに問いかけていく」ことを通して、「子ども同士がつながり、豊かな会話がかわされる」ことの重要性を学ぶ授業を行うことが必要であると思える。

提言2は、「小学校へとつながる学力の基礎としての保育実践について意識していく」上で、「比べる」「見つけた関係を整理する」「ものの性質や仕組みに気付く」「自分の成長を見つめ、振り返る」という視点につながる、子どもの具体的な言葉に気付く、広げることを学ぶ授業を行うことが必要であると思える。また、「人と人がつながる言葉を教えて

学生への指導を踏まえ、幼小接続を見据えた小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言

いく」という視点につながる子どもの具体的な言葉に気づき、広げることができるようにすることを学ぶ授業を行うことが必要であると考える。

第三点、算数科の特質に応じた数学的な表現の指導について学ぶことである。提言1は、学生が、幼児期教育における数量感覚を培うことや、算数・数学への資質・能力への接続を図ることを、視野に入れることについて学ぶことである。そのために、領域「環境」の授業では、幼稚園との接続を意識して、小学校1年生の「算数」について学び、「幼児期の教育において、遊びや生活の中で、一人一人の幼児がその幼児なりに必要感をもって、数量などへの関心をもち感覚が磨かれるような体験をしていることなどを踏まえ、指導の工夫」を行っていることについて知ることができる授業を行うことが必要であると考える。

提言2は、E1. 現実的表現、E2. 操作的表現、I. 図の表現を活用した活動について学ぶということである。そのために、領域「環境」の授業において、数える活動、図形の性質について触れる活動、積み木を片付ける活動などを通して、保育者が子どもに問いかけながら、子どもが感じ、言葉で答える活動の意味を考えることができる授業を行うことが必要であると考える。

本研究では、子どもの表現を多様な表現へと育て、小学校「生活」「算数」の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることができることを目的とした指導法及び表現の指導について視点があったため、保育園・幼稚園のカリキュラムにおける幼小接続期のカリキュラムの現状や作成に向けた実態を視野に入れて提言することができなかった。また、幼児教育の各領域と小学校1年生・2年生までの内容を対象に、小学校の各教科にその接続・関係性を学ぶことができる授業の在り方について提言することができなかった。これらを今後の課題としたい。

#### 参考・引用文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領』, 2017年
- 2) 柊島香代・尾田芽衣花・安達祐亮「遊びの充実を図る保育環境構成について」文京学院大学人間学部研究紀要, vol.14, 2013年

- 3) 増田修治「子どもの言葉を育てる保育とそのための環境作り」和光大学現代人間学部紀要第4号, 2011年
- 4) 文部科学省『平成26年度幼児教育実態調査』, 2015年
- 5) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 算数編』, 2017年
- 6) 中原忠男「算数・数学教育における構成的アプローチの研究」, 聖文社, 1995年
- 7) 藤井育亮他「新編 あたらしいさんすう 1上」, 東京書籍, 2014年

図4 アンケート用紙

2018. 7. 19  
小幡・清水

**幼稚園教諭・保育士を目指す学生の抱く「子どもの表現」に関するアンケート**

本アンケートは、幼稚園教諭・保育士を目指す学生に対して、学生の意識を調査するものです。本アンケートの結果は、子どもの表現についての研究に活用します。なお、本アンケートは成績に関係せず、学生のみなさんに不利益を与えることはありません。ご協力のほど、よろしくお願い致します。

**Q1 次の質問について、あなたの考えに該当するものに○印をつけてください。**

5 とても強く思う 4 そう思う 3 どちらにもあてはまらない 2 そう思わない 1 全く思わない

←5とても強く思う, 4そう思う, 3どちらにもあてはまらない, 2そう思わない, 1全く思わない→

項目	5	4	3	2	1
大学での授業において、子どもが「遊びを中心とする具体的な活動を通して総合的に学ぶ」中で、子どもの表現を育てることを学ぶことは大切である。					
あなたは、大学での授業において、「遊びを中心とする具体的な活動を通して総合的に学ぶ」場面で、子どもの表現をどのように育てるかを、具体的に学びたいと思っている。					
幼稚園教諭・保育士を目指すにあたり、大学での授業において、「子どもの表現を広く捉え、子どもが経験や環境への関わりを通して、様々な遊びや表現活動を行う」とはどういうことであるかを学ぶことは大切である。					
あなたは、子どもが経験や環境への関わりを通して、表現活動に取り組む様子を具体的に考えることができる。					
幼稚園教諭・保育士養成では、音楽表現・造形表現・身体表現・言語表現等に関する表現技術を、保育の目標（遊びを通しての指導を中心として、ねらいが総合的に達成されるようにする）との関連を考えて修得することが大切である。					
幼稚園教諭・保育士養成では、子どもが感じ取り、それをその子どもなりに表現するために必要な環境構成を行ったり支援したりすることについて、学生が考える機会を作ることが大切である。					
幼稚園教諭・保育士養成では、幼稚園での学びを小学校に生かすというつながりを意識しながら、子どもの体験や関わりを育てることを学ぶことが大切である。					
子どもの内面は様々な形で表出しており、保育者は、その様々な表出から子どもの内面を読み取り、共感することが大切である。					
保育者は、子どもの表現の理解者ととどまらず、保育者自身が良き表現者として子どもの前に存在することが大切である。					
保育者自身が感性豊かに身の回りの事象に興味・関心を示し、自分自身の表現を高めたり、表現する活動を楽しんだりすることが大切である。					
保育者自身が自分を表現する体験を通して心身を開放し、感性を高め、それらが身体表現と関連していることを感じられるようにするといった、大学での学びが大切である。					
保育者は、子どもが身のまわりの環境に興味・関心をもち、その興味・関心に従って身のまわりの環境への関わりを始めた自発的な行動を尊重しながら、そこでの学びを支援することを基本としていくことが大切である。					
あなたは、子どもが身のまわりの環境に興味・関心をもち、その興味・関心に従って身のまわりの環境へ関わり始めるような、自発的な行動を具体的に思い浮かべることができる。					
あなたは、子どもが身のまわりの環境に興味・関心をもち、その興味・関心に従って身のまわりの環境への関わりを始めるような環境構成を具体的に思い浮かべることができる。					
環境への関わりを通して遊ぶ子どもの様子や表現等に関するエピソード(事例)を収集することができる。					

学生への指導を踏まえ、幼小接続を見据えた小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言

項目	5	4	3	2	1
あなたは、環境への関わりを通して遊ぶ子どもの様子や表現等に関するエピソード（事例）をもとに、子どもの学びを述べることができる。					
保育者は、子どもが遊ぶ（生活）中で、子どもの数量感覚を高めることが重要であると考ええる。					
保育者は、子どもの興味や関心を十分に広げ、数量や文字に関わる感覚を豊かにできるようにすることが重要であると考ええる。					
小学校「算数」との接続を考えると、保育者は、幼児期に体験すべき算数的な活動が生まれるしかけをつくる力や子どもの活動から、小学校の「算数」につながる事柄を見出す力が重要となると考える。					
子どもの活動の中には算数・数学的な内容が埋没されていて、保育者はその活動から算数・数学的な要素を見出す力を身に付けることが重要である。					
小学校「生活」との接続を考えると、保育者は、幼児期の子どもが身近な人々や社会・自然と関わる活動が生まれるしかけをつくる力や子どもの活動から「生活」（自分と身近な人々や社会・自然と関わりをとらえる見方・考え方）を見出す力が重要である。					
幼稚園教諭・保育士を目指すにあたり、大学での授業において、環境に関わる子どもの育ちや学び及び表現を理解することよりは、実際にどのような方法で、どのような指導を行えばよいかを学ぶことに関心がある。					
幼稚園教諭・保育士を目指すにあたり、大学での授業において、実際にどのような方法で、どのような指導を行えばよいかを学ぶことよりは、環境に関わる子どもの育ちや学び及び表現を理解することに関心がある。					

**Q2 保育者になるにあたり、学生時代に身に付けておくべき力として大切であると考えるものを以下から選び、あなたの考える価値順位(1, 2, ...)をつけてください。また、該当しないものがあれば、×印を付けてください。**

子どもが主体的に試したり考えたりすることができる環境作りができる力	
子どもが主体的に試したり考えたりすることができる支援、言葉がけができる力	
いろいろな方向からみていくことにより新たな発見ができる柔軟な心	
遊びの中で、子どもの工夫、発見、思考を拾い上げる力	
子どもの育ちの中で、数学的な考え方の基礎を見抜く力	
子どもの生活の中にある素材（教材）の提供と発展を見抜く力	
実際にどのような方法で、どのような指導を行えばよいかといった直接的な指導力	

**Q3 保育者の役割として、重要と考えるものを以下から選び、あなたの考える価値順位(1, 2, ...)をつけてください。また、該当しないものがあれば、×印を付けてください。**

保育者は、子どもが行っている活動の理解者であることが大切である。	
保育者は、子どもとの共同作業者であることが大切である。	
保育者は、子どもと共鳴・共感することが大切である。	
保育者は、子どもにとって、憧れを形成するモデルであることが大切である。	
保育者は、子どもにとって、遊びの支援をする存在であることが大切である。	
保育者は、子どもの気付いていないところに気付かせる働きをすることが大切である。	
保育者は、子どもの表現を育てる働きをすることが大切である。	

- Q4** あなたの考える、「子どもの活動と子どもの表現との関連」について、おたずねします。  
 保育者として、どの活動を行いたいですか。行いたいと思う活動に○印を付けてください。そして、○印を付けた活動は、「子どもの表現」を育てる上において、どのように有効だと思われますか。あなたが、「子どもの表現」を育てる上において有効であると思うことを教えてください。  
 (活動は行ってみたいが、「子どもの表現」を育てる上において有効かどうかは見出せないと思う場合は、×印を付けてください。書ける範囲で結構です。)

【行ってみたい活動】	○印	「子どもの表現」を育てる上においてどのように有効であると思うか
文字に親しむ活動		
ものの性質や仕組みに気付く活動		
絵本を読む活動		
トランプによる活動		
アナログ時計による活動		
芋の大きさを比べる活動		
時刻と時間について言葉にして表現する活動		
気付いたことを絵や身体表現や劇など、多様な方法により表現する活動		
友だちの考えを取り入れたり、友だちと協力したりして遊びをつくっていく活動		
地域の人や年長者と関わる活動		
身近なものを使っておもちゃを作って遊ぶ活動		
身のまわりの人や友だちに伝え合う活動		
様々な図形に触れる活動		
どんぐりを転がして、見つけた関係を整理する活動		
しりとり遊び		
すごろくによる活動		
葉っぱなどを集めて形の特徴に気付き、それを表現する活動		
下駄箱で自分の履物の位置を知る活動		
コップに入っている水を様々な容器に入れる活動		
見付けたり、比べたり、試したり、工夫したり、関連付けたりして考える活動		
生き物や植物などの世話をして育てる活動		
地域の公園や野原で遊ぶ活動		
公共施設に出かける活動		
自分の成長を見つめ、振り返る活動		

- Q5** 幼稚園教諭・保育士を目指すにあたり、「子どもの表現を育てる」ことについてどう思うか、ご意見を聞かせてください。

- Q6** 「子どもの表現を育てる」上において環境の役割についてどう思うか、ご意見を聞かせてください。

ご協力ありがとうございました。

図5 アンケート結果（※一部省略）

Q1 次の質問について、あなたの考えに該当するものに○印をつけてください。	平均	←とてもそう思う 全く思わない→				
		5	4	3	2	1
1 大学での授業において、子どもが「遊びを中心とする具体的な活動を通して総合的に学ぶ」中で、子どもの表現を育てることを学ぶことは大切である。	4.6	25	20	0	0	0
2 あなたは、大学での授業において、「遊びを中心とする具体的な活動を通して総合的に学ぶ」場面で、子どもの表現をどのように育てるかを、具体的に学びたいと思っている。	4.5	25	19	1	0	0
3 幼稚園教諭・保育士を目指すあたり、大学での授業において、「子どもの表現を広く捉え、子どもが経験や環境への関わりを通して、様々な遊びや表現活動を行う」とはどういうことであるかを学ぶことは大切である。	4.6	27	17	1	0	0
4 あなたは、子どもが経験や環境への関わりを通して、表現活動に取り組む様子を具体的に考えることができる。	3.9	7	28	8	2	0
5 幼稚園教諭・保育士養成では、音楽表現・造形表現・身体表現・言語表現等に関する表現技術を、保育の目標（遊びを通しての指導を中心として、ねらいが総合的に達成されるようにする）との関連を考えて修得することが大切である。	4.5	24	21	0	0	0
6 幼稚園教諭・保育士養成では、子どもが感じ取り、それをその子どもなりに表現するために必要な環境構成を行ったり支援したりすることについて、学生が考える機会を作ることが大切である。	4.5	24	20	1	0	0
7 幼稚園教諭・保育士養成では、幼稚園での学びを小学校に生かすというつながりを意識しながら、子どもの体験や関わりを育てることを学ぶことが大切である。	4.5	25	19	1	0	0
8 子どもの内面は様々な形で表出しており、保育者は、その様々な表出から子どもの内面を読み取り、共感することが大切である。	4.7	31	14	0	0	0
9 保育者は、子どもの表現の理解者にとどまらず、保育者自身が良き表現者として子どもの前に存在することが大切である。	4.4	21	22	2	0	0
10 保育者自身が感性豊かに身の回りの事象に興味・関心を示し、自分自身の表現を高めたり、表現する活動を楽しんだりすることが大切である。	4.5	24	20	1	0	0
11 保育者自身が自分が表現する体験を通して心身を開放し、感性を高め、それらが身体の表現と関連していることを感じられるようにするといった、大学での学びが大切である。	4.5	22	22	1	0	0
12 保育者は、子どもが身のまわりの環境に興味・関心をもち、その興味・関心に従って身のまわりの環境への関わりを始めた自発的な行動を尊重しながら、そこでの学びを支援することを基本としていくことが大切である。	4.5	24	21	0	0	0
13 あなたは、子どもが身のまわりの環境に興味・関心をもち、その興味・関心に従って身のまわりの環境へ関わり始めるような、自発的な行動を具体的に思い浮かべることができる。	4.0	12	25	5	3	0
14 あなたは、子どもが身のまわりの環境に興味・関心をもち、その興味・関心に従って身のまわりの環境への関わりを始めるような環境構成を具体的に思い浮かべることができる。	3.8	7	23	12	3	0
15 環境への関わりを通して遊ぶ子どもの様子や表現等に関するエピソード（事例）を収集することができる。	4.0	10	26	7	1	1
16 あなたは、環境への関わりを通して遊ぶ子どもの様子や表現等に関するエピソード（事例）をもとに、子どもの学びを述べることができる。	3.6	3	25	13	3	1
17 保育者は、子どもが遊ぶ（生活）中で、子どもの数量感覚を高めることが重要であると考える。	4.2	17	19	9	0	0
18 保育者は、子どもの興味や関心を十分に広げ、数量や文字に関わる感覚を豊かにできるようにすることが重要であると考える。	4.3	20	21	2	2	0
19 小学校「算数」との接続を考えると、保育者は、幼児期に体験すべき算数的な活動が生まれるしかけをつくる力や子どもの活動から、小学校の「算数」につながる事柄を見出す力が重要となると考える。	4.0	13	20	9	3	0
20 子どもの活動の中には算数・数学的な内容が埋没されていて、保育者はその活動から算数・数学的な要素を見出す力を身に付けることが重要である。	4.0	12	22	10	1	0
21 小学校「生活」との接続を考えると、保育者は、幼児期の子どもが身近な人々や社会・自然と関わる活動が生まれるしかけをつくる力や子どもの活動から「生活」（自分と身近な人々や社会・自然と関わりをとらえる見方・考え方）を見出す力が重要である。	4.3	19	22	4	0	0
22 幼稚園教諭・保育士を目指すあたり、大学での授業において、環境に関わる子どもの育ちや学び及び表現を理解することよりは、実際にどのような方法で、どのような指導を行えばよいかを学ぶことに関心がある。	4.5	26	16	3	0	0
23 幼稚園教諭・保育士を目指すあたり、大学での授業において、実際にどのような方法で、どのような指導を行えばよいかを学ぶことよりは、環境に関わる子どもの育ちや学び及び表現を理解することに関心がある。	4.4	22	17	6	0	0

Q2	保育者になるにあたり、学生時代に身に付けておくべき力として大切であると考えるものを以下から選び、あなたの考える価値順位(1, 2, …)をつけてください。また、該当しないものがあれば、×印を付けてください	平均	5	4	3	2	1
1	子どもが主体的に試したり考えたりすることができる環境作りができる力	2.9	6	8	8	20	3
2	子どもが主体的に試したり考えたりすることができる支援、言葉がけができる力	2.0	2	2	8	8	24
3	いろいろな方向からみていくことにより新たな発見ができる柔軟な心	3.8	14	10	5	6	5
4	遊びの中で、子どもの工夫、発見、思考を拾い上げる力	2.7	4	5	14	7	13
5	子どもの育ちの中で、数学的な考え方の基礎を見抜く力	6.3	6	0	1	0	1
6	子どもの生活の中にある素材(教材)の提供と発展を見抜く力	5.2	11	6	1	3	1
7	実際にどのような方法で、どのような指導を行えばよいかといった直接的な指導力	4.4	4	14	8	0	4

Q3	保育者の役割として、重要と考えるものを以下から選び、あなたの考える価値順位(1, 2, …)をつけてください。また、該当しないものがあれば、×印を付けてください。	平均	5	4	3	2	1
1	保育者は、子どもが行っている活動の理解者であることが大切である。	2.0	1	5	9	9	21
2	保育者は、子どもとの共同作業者であることが大切である。	5.5	7	5	2	2	0
3	保育者は、子どもと共鳴・共感することが大切である。	2.5	1	7	4	16	13
4	保育者は、子どもにとって、憧れを形成するモデルであることが大切である。	5.5	4	4	2	3	1
5	保育者は、子どもにとって、遊びの支援をする存在であることが大切である。	4.2	12	5	13	3	2
6	保育者は、子どもの気付いていないところに気付かせる働きをすることが大切である。	4.4	17	10	8	3	0
7	保育者は、子どもの表現を育てる働きをすることが大切である。	3.5	3	12	7	9	7

Q4	あなたの考える、「子どもの活動と子どもの表現との関連」について、おたずねします。保育者として、どの活動を行いたいですか、行いたいと思う活動に○印を付けてください。そして、○印を付けた活動は、「子どもの表現」を育てる上において、どのように有効だと思われますか。あなたが、「子どもの表現」を育てる上において有効であると思うことを教えてください。(活動は行ってみたいが、「子どもの表現」を育てる上において有効かどうかは見出せないと思う場合は、×印を付けてください。書ける範囲で結構です。)	個数
1	文字に親しむ活動	11
2	ものの性質や仕組みに気付く活動	7
3	絵本を読む活動	31
4	トランプによる活動	0
5	アナログ時計による活動	5
6	芋の大きさを比べる活動	8
7	時刻と時間について言葉にして表現する活動	7
8	気付いたことを絵や身体表現や劇など、多様な方法により表現する活動	18
9	友だちの考えを取り入れたり、友だちと協力したりして遊びをつくっていく活動	32
10	地域の人や年長者と関わる活動	15
11	身近なものを使っておもちゃを作って遊ぶ活動	22
12	身のまわりの人や友だちに伝え合う活動	24
13	様々な図形に触れる活動	6
14	どんぐりを転がして、見つけた関係を整理する活動	2
15	しりとり遊び	10
16	すごろくによる活動	1
17	葉っぱなどを集めて形の特徴に気付き、それを表現する活動	16
18	下駄箱で自分の履物の位置を知る活動	3
19	コップに入っている水を様々な容器に入れる活動	10
20	見付けたり、比べたり、試したり、工夫したり、関連付けたりして考える活動	8
21	生き物や植物などの世話をして育てる活動	24
22	地域の公園や野原で遊ぶ活動	8
23	公共施設に出かける活動	6
24	自分の成長を見つめ、振り返る活動	5



学生への指導を踏まえ、幼小接続を見据えた小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言

Q5 幼稚園教諭・保育士を目指すにあたり、「子どもの表現を育てる」ことについてどう思うか、ご意見を聞かせてください。

- ・子どもが自らの内面を言葉や言葉だけでなく身体や音、歌などをつかって表現することで、子どもの好奇心を満たしながら心身の発達を促すことにつながる。
- ・表現を育てることに大切なことだと思う。自分のことを他者に伝えるときなど自分を表現しなければならないと思うから。
- ・子どもの表現を育てるということは、保育者も表現豊かでいえないと考えています。
- ・将来、子どもが自分の意見を発表したり、想いを伝えるといったコミュニケーションの土台となるものだと思います。
- ・表現は自ら育てようと思って育てることは難しいので、保育者が意識して育てていくことが必要である。
- ・話すだけでなく、様々な表現を体験し、表現が育っていくことで、そうでない子どもがより伸び伸び生き生きするのはないかと思うので大切なことだと思います。
- ・大切だと思う。幼児期がなにごとにおいても一番のびる時期だし、自分を表現することは今後大切になるから。
- ・想像力を拡げることが子どもの可能性を拡げること。
- ・日本人は思いを相手に伝えることが苦手な人が多いので小さいころからそのような力を養っていけたら良いと思う。
- ・一人の大人として、自分の考えを自分で言えるようになるための土台として大切なことだと思う。
- ・子どもの表現を育てることは、大人になっていく上で重要なことだと思うし、コミュニケーション能力も高まると思う。
- ・本人のやる気がある限り、積極的に支援していくべきだと思う。
- ・大人になるにあたって必要なので、表現力を育てたい。
- ・大切なことだと思います。体の表現もそうですが、友だちとコミュニケーションとる上で言語の表現はとても重要だと思います。
- ・先生の言葉かけ1つで子どもの発想が広がったり表現の幅が広がったりすると思うのでとても大切なことだと思う。
- ・大人になってからでは、諦めることの方が増えてしまうから、子どものうちから自己表現の経験をする必要があると考えるから。
- ・表現（＝言葉、動作、など）できる力を育てることは子ども自身の生きる力につながると思う。
- ・とても大事なことだと思う。どんどんアイデアが出て作られていく世の中だから。
- ・気持ちを表現することで感情性が豊かになる。
- ・子どもの表現力を育てることは、とても重要で、日々の保育で工夫することで育てることができると思います。幼小連携のことを考えるとますます重要であると思います。
- ・保育者がお手本を示すことも良いと思うが、子どもたち自身に考えさせることが必要だと思う。
- ・子どもがこれから成長していく上で表現力は大切になっていくと思うので、小さい頃から表現力を育てることは重要だと考える。
- ・大切なことだと思うが、難しそうであると思う。
- ・難しいことだと思う。
- ・表現が豊かになることで、人や動物など関わりが楽しくなる。
- ・自分の思いを表現できるような人間になってほしいので、表現活動は重要。
- ・表現をすることは一生つかうものであるから、それを幼児に育てることは大切だと思うし、子どもの将来

に大きな影響を与えると思う。

- ・音楽や絵本などの媒体や日常生活の動物や物など、子どもを取り巻くもの全てが子どもの感性・表現をつくっていくと思うので大事にしたいです。
- ・表現力は大切な力だと思う。子どものうちに育てたい。
- ・表現を育てることは大切だが、このアンケートでいう表現がアバウトすぎて分かりづらかった。
- ・子どもの将来に向け表現を育てることは大事だと思う。
- ・保育者が子供の表現力を育てるよう様々な取り組みや支援をすることは重要であると思います。
- ・子ども同士の会話や大人（保育者）とのやりとりから豊かな表現力を身に付けていくべきだと感じる。
- ・保育者の環境構成や予想される子どもの姿を見通し、発展につなげることのできる準備をしておくと思いいます。

Q6 「子どもの表現を育てる」上において環境の役割についてどう思うか、ご意見を聞かせてください。

- ・好奇心あふれた時期である子どもの五感をつかって、心身の発達を促すことができるという意味で環境に保育において重要であるとおもう。
- ・周りにあるものによって子どもの表現の仕方はちがってくると思う。何を置くか、どのような環境を作るか表現に大きくかかわる。
- ・子どもたちの様子からどのような環境づくりが必要なのかを見極めることが大事になってくると思います。
- ・子どもたちが学ぶには自発的な活動が大切だと思います。そしてその自発的な活動を促すために環境大切だと考えています。
- ・今まで正直環境の役割があまり思い浮かべられず、その重要性が理解できていなかったのですが、表現を育てるうえで環境の役割が大きいと思うようになりました。
- ・安全面だけでなく、子どもが自主的に表現を育てるのには環境構成が重要である。
- ・子どもが表現しやすい環境を作ることが大切だと思う。そのためにはきちんと受け止めることが大切。
- ・子どもたちに学んでもらいことは環境からできあがると思う。
- ・子どもが表現できる場を提供するのが保育士の役割だと思う。
- ・表現するために必要な勇気を手に入れる手伝いとなる役割。
- ・表現を育てる環境で学ぶことは大切。
- ・保育者が「子どもの表現」をねらいにし、子どもが自分を表現しやすい良い雰囲気づくりと材料をおくなどの環境づくりは大切だと思います。しかし、それよりも保育者が環境設定をしていない場所で自分を表現した時にくみ取ってあげることが大切なのかなと思います。
- ・表現方法が周りの環境1つで拡がったりするので重要だと思う。
- ・大人が出来る最大の配慮だと思う。子どもに気付かせるよう促して、その後に言葉で伝える。
- ・環境が整ってなければ育てる段階にまで到達できないので、重要だと思う。
- ・とても大事なことだと思います。
- ・多くの玩具や道具を揃えて充実させたいが、ある程度数が揃ったら、そこから発展して、物を見立てと想像力を豊かにさせることも必要だと思う。
- ・保育士の環境設定が綿密に考えられていることにより、子どもたちの活動は安全に発展していくと思います。
- ・子どもの感性を育む上で必要不可欠な要素であると考える。
- ・よく考えるべきで重要なことだと思う。

学生への指導を踏まえ、幼小接続を見据えた小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言

- ・環境づくりが大切だと思う。
- ・自分からはなかなか表現するのが難しい子がいると思うので表現させてあげられる環境を設けるのは大事である。
- ・環境によって子どもの表現欲求も変わると思う（例えば周りの人間の反応など）。
- ・環境づくりは大切だと思う。
- ・自由遊びの時間は子どもの興味がとても現れるときだと思うので、ずっと同じ遊具を置くのではなく、新しいものを入れたり、興味が向いているものを置いておきたいと思います。
- ・環境構成で子どもの取り組み方は変わると思うので大事。
- ・大切なことだと思います。
- ・環境構成をしっかりと行うことで子どもの遊びへの興味や喰いつき方変わると思うので大切だと思う。
- ・様々な環境が子供の育ちに影響を及ぼすため、あらゆる環境の提供が必要だと思います。
- ・様々な玩具・遊具のみならず、植物や生物も身近にあると良い。
- ・場面やその環境にあった遊びの提案などその都度していくことで、環境における子どもの学びにより深まると思います。

